初冬の奈良

山崎　正之

――早朝の奈良公園には白く霜がおり、キラキラと陽に映えてまぶしいほどだった。昨日の雑踏が嘘のように静まりかえり、くずかごの外にあふれ出た残飯をあさっていた五、六頭の鹿が、私の足音に首だけ振り返った。キョトンとした顔つきが、何とも愛らしい表情なのに思わず足を止めたとき、奈良にいることの実感を味わっていたといえるだろう。

今度の奈良行について、私は二つの目的を持っていた。その一つは久方ぶりに正倉院展を観たいということであり、いま一つは二年ごしの念願だった太安万侶の墓に詣でることであった。

正倉院展は毎年恒例の行事で、五〇～六〇点の御物が一〇月末から一一月初旬までの僅かな期間だけ、奈良公園にある国立奈良博物館で展示される。もうだいぶ長いこと、東京で観る機会には恵まれていない。東京に住む私には不満でならないのだが、翻って考えてみると、一〇〇〇年以上も保存されて来たかけがえのない品々を、そうそうお手軽に移動させることにも問題があるだろうと思われる。

二年ほど前だったか上野の博物館で「日本の書」展が開かれたとき、文字が消えかけてほとんど判読不能に近い重要美術品の掛け軸を見た。手許の図録では、比較的鮮明に写っていたのは、かなり以前に撮影したものに違いない。おそらく頻度繁く展観された結果なのだ。

事実、このたびの正倉院御物でも同様のことにぶつかった。新聞などの前評判にはならず、現物を前にして驚いたものの一つに「平螺鈿背円鏡」があった。直径約四〇センチ・白銅製の大判で、全円に六つの花紋様を分置した螺鈿技法は詳密にして華麗、極彩色に散りばめられた砕石片が例の貝殻の薄片とともに、びっしりとはめこまれている、それは声をのむほどに見事な品であった。

その背円鏡の六花紋の中央に、小指頭半分くらいの碧緑石が置かれていた。ところが、一箇所だけ右横にあたる部分の石が剝落しているのだ。図録には、一部破損した箇所もみられる、と記すが、写真をみるとそれはちゃんとついている。どのような理由で落ちたものか知るよしもないことだが、公開の展示の場での事態だけに、あるいは単純な修復のきかない破損だったのだろうか。いずれにしても、移動による事故

とみるほかあるまい。

御物中のいま一つの絶品は、方形の「海獣葡萄鏡」であった。正確には一辺一七・一糎というが、私にはもう少し大きくうつった。方鏡も珍しいものだったが、大勢の人の肩越しに見出したとき、その白銅鋳製の輝きが黄金色をあげて私の眼を射たように思えたのは、視角の加減のせいであったかも知れない。

いずれにしても、真物に接することの素晴しさを、これほど如実に示してくれる機会はそう多くないと思われる。

奈良での宿は日吉館だった。今更説明するまでもなく、戦前から奈良を訪れる学者や学生たちに親しまれ、なかでも歌人会津八一の奈良愛着はこの宿を足場にしたものである。豪華な設備も派手な接待もないかわりに、ここには古都をしのぶこころが息づいているといえよう。私の泊ったときも多勢の若者たちであふれていた。小柄な女主人は古稀を迎え、この宿を訪れる文化人たちから祝福を受けたという新聞記事をついせんだって見かけたばかりだったが、どうしてなかなかの採配ぶりであるのは嬉しかった。

奈良公園の散歩から戻り、朝食をすませたところへ昨夜頼んでおいたタクシーが到着した。目指すは太安万侶卿の墓である。田原の里と呼ばれる平城京の東、高円山の背後に連なる丘陵地の一画、通称トンボ山の中腹にあたる、とは聞いていたものの、日に数本のバスしか通らぬ場所では奮発以外にはなかったのだ。

快晴。雲ひとつない紺碧の空、山深い峠越えの曲折した道に散る木漏れ陽——対抗車に出あうこともなく、まことにさわやかなドライブであった。山あいから抜け出ると田原の里で、周囲の段丘はこれすべて茶畑である。車をおりて眺めていると、左手の陽を浴びた南斜面の中腹に土の肌を露出し、四角に柵で囲まれた箇所が目についた。しかし、そこへ行きつくにはかなりな急斜面をのぼらなければならなかった。

その木柵の中こそ太安万侶の墓所であり、発見当時（昭和五四年一月二〇日）を思いやれば、茶畑の一隅に本当にひっそりと眠っていたのだ。殊更な墓石があるわけでもなく、調査後に埋め戻したと思われる土盛りの前に小さな賽銭箱、いつ供えたのか枯れた花束が二つ、中央には「太安万侶卿千二百回忌」と記した塔婆が斜めに倒れかけて、といった有様であった。

この墓からは火葬された一個体分の人骨が発掘されているが、同時に銅板の墓誌も出土した。「左京四條四坊従四位下勲五等太朝臣安萬侶以癸亥／年七月六日卒之　養老七年十二月十五日乙巳」という墓誌銘によって、まごうかたなく古事記の撰者の墓だと決定づけられた。死んだ日付が続日本紀の七月七日と違ったり、十二月十五日がどんな日になるのか、問題がないわけではない。

田原の里には、田原東陵（第四九代光仁天皇）と田原西陵（光仁天皇の父の志貴親王、後に追尊されて春日宮天皇）のあることで知られており、両者の中間あたりに太安万侶の墓が位置する。この辺一帯、まだ発掘にいたらぬ豪族・高級官僚の墓所があるのだろうと見わたす私の眼前に、幾重にも続く波状の丘陵がそのまま歴史の重圧に耐えた沈黙とともにひろがっていた。